

「先坊の姫宮」小考：『浅茅が露』と史実との関連をめぐって

宮崎，裕子
九州産業大学国際文化学部：講師

<https://doi.org/10.15017/1809198>

出版情報：語文研究. 120, pp.46-59, 2015-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



「先坊の姫宮」小考

——『浅茅が露』と史実との関連をめぐって——

宮 崎 裕 子

一 はじめに

『浅茅が露』の「先坊の姫宮」は、主人公二位中将の仮初めの恋の相手である。

二位中将は常磐院の姫宮に思いを寄せていたのだが、斎宮に卜定されていた先坊の姫宮が母御息所の死去によってその地位を退き、常磐院の姫宮が新たな斎宮に定められたため、失意の中將は、先坊の姫宮のもとへ密かに通うようになった。しかし、先坊の姫宮を妻に迎えるつもりもない中將は夜離れがちで、嘆きのあまり病に伏せた姫宮は、加持を依頼したおじの律師に強引に言い寄られ、その現場を目撃したことを仄めかす中將からの手紙に衝撃を受け、絶望の果てに死去す

る。以上が、先坊の姫宮に纏わる物語の概要で、彼女に関する一連の記述には、『源氏物語』『狭衣物語』をはじめとした先行作品との類似が顕著である。

これは、『浅茅が露』の全体的な特徴でもあり、この物語の随所に先行作品に依拠した表現が見受けられる。こうした「先行作品に依拠した表現」は、「先行作品を継ぎ接ぎした表現」とも言い換えられようが、実は、先坊の姫宮の人物造型に援用されているのは先行作品のみではない。姫宮を取り巻く状況やその身に降りかかる出来事には、実在した皇族女性たちの人生が重ねられた部分や、『浅茅が露』の成立と近い時期に実際に起こった事件と似通うものが見受けられ、それが作中人物としての彼女の存在に一種のリァリティーを与えていると思われる節がある。

そこで、本稿では、先坊の姫宮と実在の人物との共通点について検討し、『浅茅が露』の表現手法の一端を明らかにするとともに、同物語と史実との接点に関する考察を試みる。

二 「三条高倉」邸に縁の皇族たちとの関連性

『無名草子』に言及がなく、『風葉和歌集』に作中歌が収録されていることから、『浅茅が露』は、『無名草子』が成立した一二〇〇年頃から『風葉和歌集』が編纂された文永八年（一二七二）までに成ったと推定される。その頃に実在した人物たちと『浅茅が露』の先坊の姫宮との繋がりを想起させるものは、姫宮が住む先坊の旧宅である。

先坊のおはします所は三条高倉なれば、（二位中将ノ邸カラハ）這ひわたるほどなり。御息所は、御心深く心にくき人に言はれ給ひしかば、姫宮なども心にくくもてなしきこえ給ふを、候ふ女房などもゆゑなからぬほどにて過ぎ給ひしかば……（一八二頁）^{（注1）}

一読して明らかなように、『源氏物語』において「大かたの世につけて、心にくく、よしある聞こえありて（葵巻①三一七頁）」^{（注2）}と語られる六条御息所の雰囲気を漂わせた表現である。先坊の未亡人である風雅な御息所と斎宮の地位にあった姫宮の暮

らしぶりを描写する際に、六条御息所と秋好中宮母娘に関する表現を援用するのは、常套的な物語取りの手法と言えよう。しかし、その邸宅の所在地が「三条」であることには、奇異の感を抱かざるを得ない。「三条」に邸宅を構える『源氏物語』の登場人物には、葵の上の母大宮、大宮の邸宅を相続した夕霧夫妻、尼となった女三の宮など、六条御息所の怨念による被害者側の人々が含まれているからである。

『浅茅が露』が、先坊の未亡人と遺児が住む邸を、六条御息所を想起させる人物の住居に相応しいとは到底考えられぬ「三条」の、しかも「高倉」と設定したのは、なにゆえであろうか。史実との関連を探ると、「三条高倉」邸に居住していた実在の皇族といえ、平氏討伐を企てた以仁王、彼と母を同じくする亮子内親王・好子内親王・式子内親王である。

『浅茅が露』の先坊は、物語開始時に帝位にあった常磐院と母后を同じくする有力な親王で、政治的な軋轢とは無縁の人物と設定されているが、実在の「三条高倉」邸に住んでいた以仁王は、後白河法皇と藤原成子（高倉三位）との間に生まれ、親王宣下も受けていなかった。彼の姉妹たちが内親王宣下を受けたのも、斎院及び斎宮への卜定に際してのことである。^{（注4）}

しかしながら、先坊の姫宮に関するエピソードは次の三つの点で、実在する「三条高倉」邸に縁のある皇族たちの辿っ

た人生に似通っているのである。

(1) 齋宮に卜定されるものの、伊勢へ下向することなく退下する。

(2) 姫宮の生き霊と覚しきものが原因で、二位中将が病を得る。

(3) 姫宮死後に遺産の相続争いが懸念された。

まず、(1)について史実に照らし合わせると、「三条高倉」に縁の三人の内親王は、いずれも神に仕える身となり、亮子内親王・好子内親王は齋宮に、式子内親王は齋院に卜定された。亮子内親王は、野宮に入った後、父親である後白河天皇の譲位により、伊勢へ下向することなく退下している。つまり、「三条高倉」とは、一旦は卜定されたものの伊勢へ赴くことなくその地位を退いた事例も含めて、前齋宮の住まいとして設定されるに相応しい場所だったのである。

下向前に退下した亮子内親王は、後に安徳天皇・後鳥羽天皇・順徳天皇の准母となって院号を賜り、殷富門院と呼ばれた。しかし、同じ「三条高倉」に住む、下向前に退下した前齋宮とはいえ、内親王ならぬ「先坊の姫宮」の行く末として亮子内親王の如き人生は想定できまい。そこで、浮上するのが(2)(3)であり、そのあらまは次のようなものである。

律師との関係を二位中将に知られた姫宮は、絶望の淵で死を望むようになり、追い詰められた彼女に以前にも増して冷

淡に振る舞う中将の夢の内に姿を現した。

……うちまどろみ給ふ夢のうちにも、かの宮の、傍ら離れず見え給ひて、おそはるる心地して、おどろき給ふに、我も御心地例ざまにも思されず、いかなるにかとおぼえ給へば、殿（中将ノ父関白）、上（母北ノ方）、御心騒がせ給ひて、修法何くれと御祈り始めて、（中将ガ）出で歩き給ふをも制しきこえ給へば、ことごとしからぬ御悩みなれど、籠りおはするほどに、…。

（一九一頁）

これは、六条御息所への夜離れに罪悪感を抱きつつ夕顔と過ごす光源氏の夢枕に立った、某院の物の怪に関する次の記述を想起させる表現でもある。

よひ過ぐるほど、すこし寝入り給へるに、御枕上にとをかしげなる女ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人をゐておはしてときめかし給ふこそいとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をおきおこさむとす、と見給ふ。物におそはる、心ちしておどろき給へれば、火も消えにけり。

（夕顔巻①一二二頁）

勿論、二位中将の病は先坊の姫宮の呪詛に起因するものではない。姫宮の望みは、沈み臥す自分を御簾越しに見舞うのみの中将に直に相見えることであり、彼が病を得て自分のも

とを訪れなくなってしまうては、その望みが叶わないからだ。それでも、後に姫宮を死に追いやった罪深さを自覚するに至る中將は、無意識の罪悪感も作用したためか、姫宮の生き霊に脅かされたかのように病みついてしまう。中將にしてみれば、姫宮に恨まれてしかるべき理由があるため、夢にまで出現した彼女の恋着の強さに脅かされて病に伏せた、と解せよう。

これが、六条御息所のイメージと相俟って、中將を慕う姫宮の生き霊が彼に取り憑き、病に至らしめたかのような印象を醸し出しており、姫宮の住まいが六条御息所邸の雰囲気と漂わせられていた理由の一つも、このエピソードを際立たせる効果を狙ったものと考えられる。

この後、中將はすぐに持ち直すものの、姫宮は重体に陥る。ようやく事態の重大さを認識した中將は、姫宮と対面して彼女の死期が近いことを悟り、

先坊の領じ給ひし所、この院をはじめて、さまざま御調度ども、また見譲るべき方おはせず、親しき御ゆかりもいづ方にもおはせず、心細き御さまなれば、かくて隠れ給ひなん後はいかなる人の取り争はんと思せば、皆聞こえおき給ふべし。

(一九三頁)

と、先坊から姫宮に譲られた三条高倉の院及び所領、その他

の宝物などについて、姫宮死後の相続争いを懸念し、それらの処分を差配する。

以上が、先坊の姫宮が退下後に辿る(2)(3)の概略で、「三条高倉」邸に縁がある実在の皇族にも、相続争いの渦中にあり、対立する相手を呪詛によって罹患させたと噂された人物がいた。式子内親王と以仁王女である。

式子内親王は「三条前斎院」(『明月記』)とも呼ばれ、以仁王女の父である以仁王も、『平家物語』に、

其比一院第二の皇子、以仁の王と申ししは、御母加賀大納言季成卿の御娘なり。三条高倉にましましければ、高倉の宮とぞ申しける。^(注)(巻第四「源氏揃」二七七頁)

とあるように、「三条高倉」邸に住んでいたことに由来する呼称を用いられていた。

「三条宮」(『愚管抄』)とも呼ばれた父を持つ以仁王女は、「三条姫宮」「故三条宮御娘」(『玉葉』)などと呼ばれており、この二人の女性に対して「三条高倉」邸に由来する呼称が用いられていたことが判る。したがって、「三条高倉」に住む姫宮を物語に登場させる作者の意図は、その作中人物の姿に式子内親王や以仁王女が存在を重ね合わせることにあったと考えられよう。

式子内親王と以仁王女はともに、後白河法皇の異母妹であ

る八条院暲子の猶子となっていたが、暲子が所有する八条院領の相続をめぐる確執めいたものが存在したようで、『明月記』建仁二年（一二〇二）八月二二日条に、次のような記事がある。

：故前斎院（式子内親王）、御八条殿之間、依思御付属事、奉呪咀此姫宮（以仁王女）并女院（八条院暲子）、彼御惡念、為女院御病之由、種々雜人狂言、依之、斎院漸無御同宿、於押小路殿御出家^(注6)。

八条院暲子は式子内親王の呪咀により病を得たと噂され、それゆえ、式子は暲子のもとを離れて出家した、というのである。八条院暲子には式子内親王・以仁王女の他にも複数の猶子があり、『明月記』同日条には、式子に呪咀されたと噂になった以仁王女自身が、同じく暲子の猶子である昇子内親王を呪咀し、それが原因で昇子は目を患ったと言われていたことも記されている。

以仁王女は八条院暲子鍾愛の猶子であつたらしく、暲子は彼女への内親王宣下を望んでいた。しかし、父親たる以仁王が親王ではない上に刑罰を受けた人物であることを理由に、以仁王女には内親王宣下が認められなかった。^(注7)この措置には、八条院領相続者としての昇子内親王の立場を有利に保つたために以仁王女の内親王宣下を阻止しようとした、昇子の祖父九

条兼実の思惑が絡んでいたとされる。^(注8)以仁王女が昇子内親王を呪咀したという噂の背景には、こうした相続に関する対立があり、この噂を流したのは九条家側ではないか、との指摘もある。^(注9)結局、以仁王女は元久元年（一二〇四）二月二十七日に没し、その突然の死は世人を不審がらせたという。^(注10)

いずれにせよ、式子内親王と以仁王女が実際に呪咀を行ったという確証はない。ただ、彼女たちに恨まれそうな相手か病を得て、その原因が彼女たちの呪咀ではないかと噂されただけであり、この点も、二位中将を呪ったわけでもないのに、彼の病の原因となった『浅茅が露』の先坊の姫宮によく似ている。加えて、二位中将が姫宮死後の財産処分を差配する前掲箇所は、八条院領の伝領をめぐる繰り広げられた争いを踏まえた一文ではないだろうか。

このように、「三条高倉」に縁の宮家の人々には、呪咀に関する噂と相競争いとのイメージがつきまとい、『浅茅が露』の先坊の姫宮には、それが投影されていると考えられるのである。

三 「藤原為家作者説」に寄せて

『浅茅が露』の成立時期の上限については、引歌から成立年代を絞り込んだ大槻脩氏が建長三年（一二五一）と推定され、^(注11)

鈴木一雄氏・伊藤博氏・石埜敬子氏による『中世王朝物語全集』(笠間書院、一九九九年)の解題でも「後嵯峨時代を大きく離れるものではない」とされている。また、「藤原為家作者説」を提示した辛島正雄氏は、娘に先立たれた為家が悲しみを紛らわすために執筆した作品である可能性を指摘し、為家の娘大納言典侍が没した弘長三年(一二六三)以降の成立ではないかとの仮説を示された。^(注12)

『明月記』によれば、八条院暲子らへの呪詛を疑われた式子内親王は父後白河法皇の承諾を得ぬまま出家しているため、^(注13)彼女に関連する呪詛事件が起こったのは、後白河法皇が存命であった建久三年(一一九二)以前である。また、八条院暲子と昇子内親王とを呪詛したと噂された以仁王女が不審な死を遂げたのは建仁四年(一二〇四)のことであり、御嵯峨院の即位からも四〇年近く遡る出来事であった。果たして、「先坊のおはします所は三条高倉」という一文で、前斎宮である殷富門院亮子・好子内親王、八条院領の相続争いがもとで呪詛の噂を立てられた式子内親王・以仁王女を思い起こすことができる読者が、どれほど存在したのであろうか。この点が、『浅茅が露』の作者及び、この物語が作り出された当時に読者として想定された、作者本人に近い人々を探る手懸かりになりそうである。

『浅茅が露』の作者については、前述のように辛島正雄氏が「藤原為家作者説」を提示され、^(注14)「中世王朝物語全集」の解題でも、「為家ないしその周辺の人物が有力視される」との見解が示されている。

為家の生年は建久九年(一一九八)で、当時すでに式子内親王は出家しており、以仁王女の不審死も彼が幼い時期の出来事であった。しかし、式子内親王のもとへ度々伺候していた父定家の『明月記』等から呪詛事件のあらましは把握していたと考えられ、一連の騒動が為家に強く印象づけられていたとしても不思議はない。それは、彼の周辺にいる人々にとっても同様であろう。

したがって、彼女たちの身の上に実際に起こった事件を再現させられた「先坊の姫宮」という作中人物も、あくまでも『浅茅が露』成立当時の読者という限定的な範囲においてではあるが、十分にリアリティーのある存在であったと思量される。

四 将軍御息所密通事件との類似点

ところで、実在した人物たちと『浅茅が露』の先坊の姫宮との類似が指摘されるもう一つの出来事は、加持のために近侍した僧侶との関係である。

前述のように、二位中将のつれなさを嘆いて臥せった先坊の姫宮は、加持祈祷を依頼した母方のおじに当たる律師にある夜、強引に言い寄られる。

(姫宮ハ) いともの恐ろしく、そぞろなる目を見るべきにやと、やをら屏風のなかにすべり入り給ふを、引きとどめられぬるに、いとど心憂く、かなしく、泣き入り給へるに、静めあへぬ心のうちをもの恐ろしきまで言ひ続け思ひまどひたる(律師ノ) 気色の、わが心を尽くす人のかく訪はましかばと思ひくらべらるるは、もののおぼゆるにやと、我ながらうとましようぞおぼゆる。

(一八六―一八七頁)

無体に迫られることは恐ろしく辛いものの、切実に恋情を訴えかけてくる律師の姿を「わが心を尽くす人」である二位中将と比べ、目の前にいる相手が中将であつたならと思つてしまふ自らを嫌悪する姫宮の複雑な心境には、彼女を一方的な被害者と断じきれないものがある。

次の夜更け、久しぶりに姫宮の邸を訪れた二位中将が、律師の読経の声にあわせて念誦する姫宮の様子を垣間見ていることから、姫宮は、律師に強引に迫られた挙げ句、密かに通ずるに至つたことを嘆いてはいるが、少なくとも律師の存在そのものを疎ましく思つてはいないことが窺える。これは、

『海人の荊藻』の藤壺女御が、強引に迫つてきた中納言を嫌悪し、彼の姿を御簾越しに見ただけで、

世になき鬼などに向かひたらんやうに疎ましく、ただ今御そばへ入り来たるやうに思して、御顔さと赤みて、寄り臥し給ふ^(注15)。

(巻二・一一一頁)

と、恐れおののく様とは対照的である。^(注16) おそらく、消極的にはあるものの、律師の恋情に心を揺さぶられた数瞬間があつたのだと解釈できよう。

こうした姫宮の心の動きには、『とりかへばや』の四の君が、密通相手の宰相中将に心を傾けていく有様を語る次の箇所に通じる印象がある。

中納言のいともでたくすぐれながら、よそ／＼にて、人目ばかり情あるさまに、のどやかにさまよき目移しには、かういといみじく死ぬばかり思ひ焦らる、人(宰相中将)を、心ざしあるにこそと(四ノ君ハ) 思ひながら、けしきにても人の漏り聞きたらん時と、恐ろしうそら恥づかしきに、人知れぬあはれの見知られずしもあらずなりにけるも、我ながらいと心憂と思ひ知る^(注17)。

(巻一・一四二―一四三頁)

自らの性を偽る女中納言と結婚したため、誠実そうではありながら、どこか隔意を感じさせる夫の態度に漠然とした寂し

さを抱いていた四の君は、その心の隙間を埋めるかのように、恋死にしそうな勢いで迫ってくる宰相中将に惹かれていくが、その一方で、宰相中将の思いを受け入れてしまいそうな自分自身を嫌悪している。このような四の君の姿が、愛情薄い相手との仲に悩み、激しい恋情を訴えて迫る他の男性に心を許しそうになる、という先坊の姫宮の造型に活かされているのであろう。

また、つとに今井源衛氏が指摘されたように^(注18)、先坊の姫宮は『狭衣物語』の飛鳥井女君の影響を受けて造型された人物で、密通相手が僧侶であることは飛鳥井女君に倣った設定だと考えられる。

『浅茅が露』には失踪した女性の身を案じる文脈で「狭衣の道芝の姫君（飛鳥井女君）のやうなることもやと、太秦法師などぞ疑はし（二二九頁）」という、『狭衣物語』をあからさまに摂取した表現があるほどで、二位中将の叶えられなかった恋の相手である常磐院の姫宮も、狭衣大将の叶わぬ恋の相手であった源氏の宮を想起させる人物として描かれている。

したがって、先坊の姫宮と律師との密通は、仁和寺の威儀師に拐かされかけた『狭衣物語』の飛鳥井女君の儚い一生を、先坊の姫宮の身の上に重ね合わせる効果を狙ったものと思われる。両親を亡くした飛鳥井女君の生活は威儀師の庇護によっ

て成り立っており、先坊の姫宮もまた、母方の後見人は律師のみであった。邪恋を挑んでくる僧侶が自分にとっては頼みとする相手であったということも、二人の女性の共通点である。

『住吉物語』でも、主人公の姫君が、彼女の入内を阻止しようとした継母の奸計によって、六角堂の法師を密かに通わせているとの濡れ衣を着せられており、称徳天皇と道鏡、二条后藤原高子と僧善祐に関する醜聞の事例等もあることから、高貴な女性と僧侶との密通は、スキヤンダルの設定としてさほど特異なものではなかったのかもしれない。

ところが、文永三年（一二六六）に、「僧侶との密通によって破局を迎える男女」という「先坊の姫宮・二位中将・律師」三者の關係によく似た事件が出来る。同年七月に鎌倉幕府六代將軍宗尊親王が謀反の嫌疑をかけられて將軍職を追われる切っ掛けになったとされる^(注19)、將軍御息所近衛宰子と松殿法印良基との密通事件である。その翌年に宰子は出家しており、『民経記』文永四年九月四日条には、次のような記事が見える。

御休所^{前中書王}前室^{前案王}今日令落飾給、浄土寺前大僧正為戒師云々、^(注20)

ここで「中書王（宗尊親王）前室」と呼ばれている宰子は、すでに宗尊親王の正妻の地位にはなく、密通の発覚を契機に二人の婚姻関係は破綻したと考えられる。

宰子の密通相手の良基は、宗尊親王の護持僧の一人で、親

王が將軍職にあった当時の鎌倉仏教界の重鎮であった。^(注2)『吾妻鏡』によると、宰子が出産する際にも安産の祈祷を行っていた。^(注3)宗尊親王のみならず、宰子にも近侍して加持祈祷を行ったことが契機となり、二人は密通に及んだのであろう。これは、『浅茅が露』の先坊の姫宮が病氣平癒の加持をおじの律師に依頼し、それが端緒となって律師の侵入を許したことと似通っている。

『浅茅が露』の先坊の姫宮邸は人少なで乳母もすでに死去していたため、律師は姫宮の側へ容易に忍び込むことができたのだが、鎌倉將軍の御息所の身辺がそのような状況にあったとは考え難く、良基との密通には宰子の積極的な意思が働いたものと思われる。そのあたりの事情も、律師との密通を嘆きながら、律師本人を嫌悪してはいない姫宮の姿に相通ずるものがあり、『浅茅が露』には同時代に世人の耳目を集めた醜聞とよく似た出来事が描かれていたことになる。

後嵯峨院の中宮であった大宮院姞子の命で編纂された『風葉和歌集』には、『浅茅が露』の現存部分から九首、末尾の散逸部分から一首、計一〇首の作中歌が採られており、『浅茅が露』が後嵯峨院の周辺で享受されていたことが知られる。『風葉和歌集』の成立は、宰子の密通に端を発する一連の事件からわずか五年後の文永八年で、当時は宗尊親王もその父であ

る後嵯峨院も在世中であつた。しかしながら、宰子の不祥事を想起させかねない『浅茅が露』が、『風葉和歌集』の撰集に際して忌避された様子は窺えず、先坊の姫宮の詠歌及び彼女に関連する歌は入集していないものの、現存部分に見える和歌の三分の一が採られており、他の物語に比して撰入率が高くなっている。^(注4)

後嵯峨院父子は物語中のエピソードと宰子のスキヤンダルとの類似に目くじらを立てるほど無粋ではなかったのかもしれないが、彼らの周辺で忌避されずに済んだ理由を、あえて『浅茅が露』そのものの中に求めるならば、その一つとして挙げられるのは、『狭衣物語』撰取の顕著さであろう。前述のように、先坊の姫宮と律師との関係は、『狭衣物語』の飛鳥井女君と威儀師の関係に依拠していることが明らかたため、宰子に裏切られた宗尊親王への遠慮はさして必要ではなかったと考えられる。

もう一つは、律師に対する先坊の姫宮の感情が醜化されていることではないだろうか。宰子は自ら進んで密通に及んだようだが、律師を疎んではない先坊の姫宮が、再び迫ってきた彼に對していかなる感情を抱いたのか、『浅茅が露』はその真情を一切語らず、姫宮の居室に再度忍び込む律師の姿を目撃し、不審に思つて跡をつけた二位中将が、律師に近付か

れた姫宮の気配を窺う場面は次のように描写されている。

：宮、今宵はさりとともと（二位中将ヲ）待ち給へるに、
更けゆく夜のさまに、例の、漁夫も釣するばかりにて臥
し給へるに、律師は出でぬと思すほどに、思ひのほかに
ほのめき寄る気色、待つ人にまがふべきかは。（姫宮ハ）
憂しと思しめし入りたれど、中将は、さばかりにやと聞
き給ひければ、憂き世にこそありけれと見はて給ひて、
なほたち帰り給ひぬ。

（一八九—一九〇頁）

二位中将を待ち侘びて泣き沈む姫宮が、忍び寄ってきた律師にどのような態度をとったのか、具体的なことはここには一切記されていない。彼女の心情が、ただ「憂しと思しめし入りたれど」と語られるのみである。しかし、姫宮と律師との遣り取りを聞いた中将が、二人は示し合せて逢瀬を持ったのだと思ひ込んでゐるため、少なくとも中将が耳にした範囲では、律師の訪れが姫宮にとって不本意だと察せられるものではなかったようだ。ここに省略されているのはおそらく、先夜同様に揺れる心の一端を覗かせてしまった姫宮の姿であろう。

律師に侵入された先坊の姫宮とは事情がやや異なるものの、忍び逢う男女の遣り取りを他者が窺い知るといふ場面は、『とりかへばや』にも描かれており、女中納言が帳台の内忍び

逢う四の君と宰相中将の気配を目の当たりにして、妻の密通相手の正体を知る際には、思ひの丈を訴える宰相中将に靡く四の君の様子がはっきりと描かれている。

よろづをかき尽くし、さばかりくまなく色めかしき色好み（宰相中将）の、深くあはれと心にしめられんと尽くし給ふ言の葉・けしき、何の岩木もなびきつべきに、女君も心強からずうち泣きて、いみじうあはれげなるけしきに、いとゞたち別るべき空もなし。（巻二・一七五頁）

この『とりかへばや』の表現と比較すると、『浅茅が露』の先坊の姫宮が律師に再び迫られた前掲の場面では、二位中将が何を以て姫宮と律師との関係は合意の上なのだと判断するに至ったのか、その核心部分がおぼめかされており、二人の仲を二位中将が誤解したという印象を与えるような筆致になっている。しかも、それが誤解なのかどうか、真偽の程も不明なのである。

『浅茅が露』には先行作品に依拠した表現が目立ち、律師の一度目の侵入に際しては、先坊の姫宮の心境が、宰相中将に惹かれていく『とりかへばや』の四の君の心情に似通うものとして描かれていた。ところが、二位中将が姫宮と律師との関係を知る場面では、『とりかへばや』に倣った直截的表現を採らない。これはおそらく、やがて死去する姫宮の最期を二

位中將に看取らせるための伏線であろう。

『とりかへばや』の場合、女中納言には自らの正体を隠して四の君を欺いているという、いわば決定的な弱みがあり、四の君が宰相中將に心を傾けるのも無理からぬことと思われる点もあるのだが、それでも『無名草子』は四の君を「憎き」と酷評している。

それとは対照的に、『浅茅が露』では先坊の姫宮の律師に対する感情が醜化表現に終始したからこそ、姫宮はつれない二位中將と邪な律師とに追い詰められて死に至る被害者と印象付けられ、姫宮に裏切られたと思いついていた中將が、重体に陥った姫宮を看病し、自身の冷淡さが彼女を追いつめたことを自覚するに至る、という展開に無理なく繋がって行く。こうして、律師に迫られながらも二位中將を慕い続けた姫宮は漸く報われ、心を尽くして彼女の後世を弔う中將の姿は見る人の涙を誘い、中將は恋物語の主人公として大いに面目を施すことができた。

このように、二位中將に突き放された結果としてもたらされる「先坊の姫宮の死」を構想しても、主人公である中將に死に行く女性を冷たく捨て置かせるのは不都合である。とはいえ、中將に合意の上の逢瀬と思いついた姫宮と律師との遣り取りがどのような内容であったのかをあらさまに描写

すれば、律師との関係を中將に知られ、懊悩の果てに死を迎える姫宮の悲劇も読み手の同情を誘い難く、中將が姫宮の最期を看取り、彼女の菩提を弔う姿にも共感を得られない恐れがある。ゆえに、律師の二度目の侵入に際しては、姫宮の心情を詳細に描写することを避けたのではあるまいか。

『浅茅が露』の成立が文永三年七月よりも前なのか後なのかは不明だが、^(注24) いずれにせよ、二位中將が耳にした姫宮と律師との遣り取りが詳細に描かれていれば、文永三年七月以降の読み手の脳裡には宰子と良基との密通事件が浮かびかねない。さらに、姫宮が中將に見捨てられたまま死を迎えていれば、宗尊親王を裏切った宰子を断罪するかのような印象を与えてしまう可能性もあった。

はからずも、主人公たる二位中將に傷をつけないようにした措置が奏功し、運命に翻弄されて儂く人生を終える先坊の姫宮の姿は、自らの意志で密通に及んだ宰子のイメージを強く呼び起こすものとはならず、『浅茅が露』は後嵯峨院及び宗尊親王の周囲でも忌避されることなく読み継がれていたのであらう。

それでもやはり、先坊の姫宮がわずかながらも律師の恋情に心を動かされた一度目の逢瀬が、宰子と良基との一件を彷彿とさせるものであることは否めない。その後の展開で先坊

の姫宮から宰子のイメージは払拭されるものの、宰子の密通を知る読者から見れば、姫宮が微かに垣間見せた心の深奥は、妙に生々しく映ったものではあるまいか。良基と密かに通じた宰子を彷彿とさせるが、さりとて宗尊親王を憚るほどでもない。そのあわいで、先坊の姫宮は不思議な存在感を漂わせていたのかもしれない。

五 おわりに

以上、検討してきたように、『浅茅が露』は、『三条高倉』邸に縁の皇族女性たちと『狭衣物語』の飛鳥井女君とを念頭に先坊の姫宮を造型し、それに合わせて『源氏物語』『とりかへばや』等の先行作品を摂取したようである。

三条高倉邸に縁の皇族女性たちに想を得て、前斎宮でもある先坊の姫宮が冷淡な二位中将に恋い焦がれて彼の夢に姿を現したところ、それが原因で中将は病を得るという展開を構想し、六条御息所・秋好中宮母娘のイメージを援用して姫宮の人物造型に肉付けをした。さらに、『狭衣物語』の飛鳥井女君に倣って、先坊の姫宮の人生の終末を、律師に強引に言い寄られ、二位中将との仲に絶望した挙げ句の死と定めたが、主人公である二位中将に死を迎える姫宮を見捨てさせぬため、

二位中将の夜離れを嘆くあまり、律師に心を許しそうになる姫宮の姿を描く際に、隔意を感じさせる夫に悩む『とりかへばや』の四の君が宰相中将に心を奪われる心理描写を援用しながらも、四の君と宰相中将が合意の上で逢瀬を持った事実を女中納言が目当たりにする場面は取り込もうとしなかった。

『浅茅が露』は、まず実在した人物や先行作品の内容を取り込んだ物語を構想し、その展開に沿わせるかたちで、複数の先行作品から詞章等を摂取していったのだが、先行する物語をどのように利用するのかについては、一定の方針に基づく取捨選択がなされていたようである。

つまり、先坊の姫宮に纏わるエピソードは、先行作品の単なる継ぎ合わせではなく、史実に基づいた人物設定も取り入れ、それらに合わせて、先行する作品を必要に応じて援用しながら形づくられたものと考えられる。とすれば、この物語が成立した当時の読者たちは、先坊の姫宮を、過去の物語に登場した人物たちの単なる継ぎ合わせではなく、実在の人物たちをもモデルにして造型された、リアリティーのある作中人物と見ていたのではあるまいか。しかも、偶然なのかもしれないが、『浅茅が露』の成立と近い時期に、世を騒がせた宰子の密通事件が起こっており、この一件も先坊の姫宮という架空の人物に、現実味を些かなりとも追加する役割を果たし

たであろう。

『浅茅が露』において、先坊の姫宮はさほど重要な登場人物ではない。二位中将の仮初めの恋の相手として早々に舞台から姿を消す、所謂端役に過ぎない存在である。しかし、姫宮の儂い生には実在した人々の人生も反映されており、虚構と現実とが絡み合うその姿は、『浅茅が露』の中で確かな存在感を醸し出していると言えよう。

注

注1 『浅茅が露』の引用は『中世王朝物語全集』に拠り、引用者による注を付した。

注2 『源氏物語』の引用は『新日本古典文学大系』に拠り、一部表記を改めた。

注3 存命中に「三条」が居住地であると明記されることはなかったが、薨の上もまた「三条」の邸宅の住人であった。

注4 伴瀬明美「中世前期——天皇家の光と陰」（服藤肇苗編著『歴史のなかの皇女たち』小学館、二〇〇二年）

注5 『平家物語』の引用は『新編日本古典文学全集』に拠った。

注6 『明月記』の引用は『冷泉家時雨亭叢書別巻二 翻刻明月記一』に拠った。引用に際しては、一部表記を改め、引用者による注を付した。なお、『明月記』当該箇所「姫宮」が誰を指すのかについては諸説あったが、建仁二年頃に『明月記』で八条院の「姫宮」と表記されるのは「以仁王女」であることが、遠城悦子氏の「春華門院昇子内親王の八条院領伝領についての一考察」（『法政史学』第四八号、一九九六年三月）によって明らか

にされた。

注7 『玉葉』建久七年一月二一、二三、一五、一六日条。

注8 金澤正大「八條女院と九條兼實外孫昇子内親王」（『政治経済史学』二三二号、一九八五年九月）

注9 遠城悦子前掲論文（注6）

注10 『明月記』元久元年二月二七日条。

注11 『あさちが露の研究』（桜楓社、一九七四年）

注12 『浅茅が露』作者考（その二）——藤原為家作者説の可能性（『中世王朝物語史論 下巻』笠間書院、二〇〇一年）

注13 建仁二年八月二日条。

注14 『浅茅が露』作者考（その一）——藤原為家作者説の仮設（『中世王朝物語史論 下巻』笠間書院、二〇〇一年）

注15 『海人の荇藻』の引用は『中世王朝物語全集』に拠った。

注16 現存する『海人の荇藻』は『風葉和歌集』以降に成った改作本であるが、原作本を批評した『無名草子』の記述に、

また、中宮の、むげに何事もおぼしたらぬこそ、大納言も心劣りして口惜しけれ。同じ心にうち離き、心を交はし、文の返り事などこそせざらめ、御心のうちには、いとあはれとおぼさるべきなり。（新編日本古典文学全集二五〇頁）とあることから、原作本でも中宮（藤壺女御）は大納言にまったく心を傾けなかったようである。

注17 『とりかへばや』の引用は『新日本古典文学大系』に拠り、引用者による注を付した。なお、『浅茅が露』が成立した当時には、現存する今本『とりかへばや』のみならず、散逸した古本も読まれていたが、『浅茅が露』が做ったのは、『無名草子』で理想的な女性と評された古本の四の君ではなく、夫以外の男性に心を寄せたことを非難された今本の四の君である可能性が高い。

注 18 「王朝物語の終焉」（辛島正雄編『今井源衛著作集 第11巻』筈岡書院、二〇〇六年）

注 19 小倉秀貫「鎌倉六代將軍宗尊親王」（『史学会雑誌』第二四号、一八九一年一月）

注 20 『民経記』の引用は『大日本古記録 民経記（九）』に拠り、一部表記を改めた。

注 21 永塚昌仁「鎌倉殿護持僧についての一考察——源家三代期から宗尊親王期までを中心に——」（『山形大学歴史・地理・人類学論集』第八号、二〇〇七年）

注 22 弘長三年十一月一六日条等。

注 23 辛島正雄前掲論文（注14）

注 24 仮に『浅茅が露』の成立が文永三年七月以降ならば、この物語は同時期に世人の耳目を集めた醜聞を反映した作品であったことになる。世情を騒がせた宰子の密通事件から『浅茅が露』成立時期の下限となる文永八年までの五年弱の間に、先坊の姫宮と律師との関係を描けば、読み手は容易に二人の姿を宰子及び良基と結びつけたに違いなく、それは『浅茅が露』の作者にとって、回避すべき事態であろう。宗尊親王の御息所であった宰子の密通を題材にしたエピソードを、明らかにそれと判るように描き込むことは、『浅茅が露』の享受圏では憚られたはずである。したがって、この場合、律師の二度目の侵入から姫宮の死、二位中将による供養へと辿り着く展開は、宰子の密通事件を下敷きにしながら、敢えてそれを前面に押し出さず、むしろ読者の目を巧みに逸らすことを企図したものと考えられる。

（みやざき ゆうこ・九州産業大学国際文化学部講師）